

エスニック集団としてのアイヌ

—— 二風谷のアイヌの事例を中心に ——

陳 香 蘭

この論文は、現代日本社会においてアイヌのエスニック・アイデンティティは民族的なエスニック集団の社会的意味で究明する。この踏査に用いられる方法は、主に二風谷のアイヌを事例として、理論的そして経験的分析を行い、エスニック集団の維持機能を究明するのである。踏査の結果は、血縁に基づく紐帯と自分たちの権利を主張する組織の存在が、エスニック集団の凝集力を高める機能を果たし、メンバーのエスニック・アイデンティティの形成と確立に寄与している。

はじめに

「日本単一民族国家論」という考え方は日本政府と国民の同一認識である。一民族支配によって異なった民族は日本民族に同化されるしか存在できないということである。アイヌはその代表的な異民族である。同化されたアイヌは日本の国籍を持って、川魚やイオマンテという熊祭りなどの伝統的な生活習慣、祭事を失ってる。だからといって、アイヌはもうアイヌではなくなり、日本人であると言えるか。アイヌはアイヌであることはどういうふうに判断されるか。アイヌのエスニック・アイデンティティの凝集力はどこにあるのか。さらに、アイヌであることと日本人であることは日本社会について何を語っているか。

アイヌという集団をよく定義するために日本における他の集団と比べることが必要となる。アイヌの他に韓国・朝鮮人や中国系の人々も存在している。そのうち在日韓国・朝鮮人は日本に征服されたアイヌと違って、かれらは強制連行の理由で日本に来て、日本の敗戦と共に日本に留まった。そして二世、三世

の韓国・朝鮮人は「日本文化」は内面化してるが、日本人にとって、異民族の血を引き、かつ、外国人の人たちである。アイヌのように同化されることもなかった。このような集団とアイヌ集団は社会学の範疇でどういうふうに定義するのか。

また、現代日本社会においてアイヌのエスニック・アイデンティティは民族的なエスニック集団の社会的意味で究明したいと思う。この踏査に用いられる方法は主に二風谷のアイヌを事例として、理論的そして経験的分析を行いエスニック集団の維持機能を究明したいのである。

1 民族 (Nation)・人種とエスニック集団

近代において、民族と人種とは同一概念という仮説をよく使われ、その仮説を学問的に主張し、あるいは政策的に実践しようとしたのが、人種主義である。19世紀フランスの人種主義者ゴビノーは、最初の理論的人種主義者の一人として後世の著述家たちに大きな影響を与えており、その結果人種主義は一般化していったのである¹⁾。

人種、したがって民族は一定の身体的特徴を遺伝的に受け継ぐ唯一の優れた人種が真の文明を創造しうる、というゴビノーの主張によって確立されたヨーロッパにおける人種主義＝ドイツのアーリアニズムは、それぞれの時代の社会・政治情勢を反映して増殖作用を起こし、人種と文化の結合という根本原理を堅持しながら、対象のみを自在に替え、様々な人種主義を形成した²⁾。優劣のある多様な文化の存在は、それぞれの文化を担っている人々の心理的精神的素質や知的能力の違いに起因するもので、優れた文化は優れた知能を持つ人種によって生成されるとする³⁾。

人種は元来遺伝的起源を有する身体的特徴の、ある一定の組み合わせによって人類を分類したものである。しかし、人類の移動と征服を繰り返し、無限の変転のなかで複雑な遺伝子構成を持つに至ったヨーロッパ人の諸集団間で生物学的な人種を基準に分類するのは容易ではない。故に、ヨーロッパの人種主義の対象の範疇を、生物学的なものから民族あるいは階級に替え、結び付けることは無理ではない。人種は暫定的な定義を有するものと思われ、可塑的、柔軟

性のあるもので、時・場所・環境とともに変わるものである⁴⁾。純粋な人種、つまり他の人種と全く混合しない人種など存在しない。文明諸国間におけるように、人種は主として仮説に基づくことが常であるから、集団の共同関心を決定する真の要因ではない。

民族は社会的・文化的区分であり、「われわれ」という共通な意識を持つことによって結合している集団で、必ずしも遺伝的に同質であるわけではない。一方、人種は周囲の集団と文化的異同に関係ない。むしろ、生物学的出自によって共通の遺伝的身性の諸特徴の一全体を示す人の自然的群という事実によって他と区別される集団と規定すべきで、両者は本来異なるものである。

マッキーヴァーは民族の整合について、整合の特性は民族間の関係であって、人種のそれではないことを強調した。民族は自立したアソシエーションである国家を通じて、本質的関心を追求し⁵⁾、民族の自由を達成するための自治的単位を形成する集団である⁶⁾。マッキーヴァーは民族と人種との違いについて次のように述べた。

「民族とはある種の自然のコミュニティを意味し、いかにしてそれが発生しようとも、われわれの肉体的存在法則に従って、共同生活を営んでいるいかなる集団にも発展する類似心意、つまり、文化が進むにしたがって、同一血族という観念では、もはや支え切れなくなった人々の同一精神というものである。人種という観念は…(略)…血脈の維持、増殖、隆盛以上の理想を提示し得ないのである。人種という観念は、未だ明確な活動形態を見出し得ない未分化の生命力の表現にすぎず、ある集団がかかる抽象的観念を注入して活気を鼓舞しようとも、それはなお原始的で未分化の状態にとどまり、その意識も無分別な欲望の媒介物たるにすぎない」⁷⁾。民族による堅固な統一を血縁のみに求め、しかもその血縁がいかなる本質的関心もない場合は、その集団が明確な目的を持ち得ることは希少である。例えば、先住民の社会的存在価値などに関する本質的関心を起こさない限りは、血縁の絆があっても、社会的同化の過程が進展されることによって自己の統一可能性もなくなりやすくなる。ところが、その民族自身が共同活動を行う際、個人や集団を「われわれ」の範疇に繰り入れるために、血縁の絆が求められることが多かった。前述したように、その血縁とはただ想像上の血縁にすぎない。このようにして、民族共同体を形成する場合

は、人種という衣をつけることになる。

エスニック (ethnic) という語源は、ギリシア語 *ethnos* の形容詞 *ethnikos* から由来するもので、宗教的 (religious)、人種的 (racial)、民族的 (national)、あるいは文化的 (cultural) な集団に所属する意味に相当する⁸⁾。エスニックと並んで、エスニシティは1950年代以降、1960年代にかけて文化的多元主義研究の一環として、次第に普及してきたもので、比較的新しい語である。それはエスニック性あるいはエスニックなもの、といった意味であとから作られた名詞であろう⁹⁾。エスニックが他の語と結び付いて用いられる例で最も多いのは、エスニック集団 (ethnic group) であろう。1960年代末から70年代にかけて、エスニック・コンフリクトの事態を登場し、それを表現する用語として世界の先進諸国で、エスニック集団やエスニシティなどの概念が採用されるようになった。例えばカナダにおけるケベック州のフランス系住民、アメリカの黒人と白人に見られる分離・独立運動ないし対立などを分析する際に用いられる。それ以来、エスニックの用法は拡大し続いている。言語集団、宗教集団、移民集団などは一つのエスニック集団として通用する限り、先住民問題、人種集団もその枠組みのなかで取り上げられる。すなわち、エスニックの概念は既成のエスニック集団 (例えば、先住民・バルト3国) に用いられているのではなく、一定の社会的条件のなかで、再生産されるものとして位置づけられている。

エスニックは、「より大きな社会の下位集団 (subgroup) として存在する、共通の文化伝統とアイデンティティを伴った集団」と、定義されている¹⁰⁾。また文化的同質性をもった人種集団としてのエスニック集団を「多人種・多民族社会において、政治・経済的に従属的地位を強いられ、かつ文化的に正当な評価を得ていない」少数民族であるとも定義される¹¹⁾。

これらの定義は、エスニック集団を下位集団や少数集団と同義にしており、既成のエスニック集団の問題は植民地時代以来再び、いわゆる文明国家の問題意識の枠組みのなかから除かれた。しかし、エスニック集団はより大きな政治社会の従属集団である必要がない。以前は、非ヨーロッパ人としてアジア・アフリカ人が抑圧的な植民地主義に反対して立ち上がるのを目撃してきた。今、われわれは現代国家の支配者に対してエスニック集団が立ち上がるという事実

さて、エスニック集団とは、コナーによれば「身体的特徴及び文化の単一性によって特徴づけられた基本的な人間のカテゴリーである」¹²⁾とされる。このように定義されたエスニック集団はエスニックな独自性を未だ意識するに至っていない集団で、その成員がエスニックな独自性を意識した時にその集団は民族とみなされる¹³⁾。つまり、民族とは主観的な意識にもとづく概念であり、エスニック集団とは客観的な意識に基づく概念なのである。エスニックの覚醒を基本的な人間のカテゴリーとしてのエスニック集団が保持する権利と見なしている。そこで、基本的な人間のカテゴリーとしてのエスニック集団をエスニック集団と定義し、目覚めつつある段階のエスニック集団は民族的なエスニック集団と定義する。

今、なぜエスニック集団を問うのかという問題は、理論的アプローチの範疇でよく取り組まれている。60・70年代の第三世界を中心とした民族解放運動の興隆と「国内植民地」を生むことになるミカエル・ヘクターのイギリスにおいての「中心－周辺」図式、つまり、経済と文化の両面において「支配－従属」関係が形成された状態によると、経済的搾取のみならず文化的差別ゆえに、中心部に対抗する地域＝民族運動が発生すると解釈され階級理論と民族理論とを結び付けた¹⁴⁾。

このような取り組み方は、エスニック集団を生む条件には言及しているものの、バスク人やアイルランド人のテロリストを動機づけている熱狂にまったく言及していない。要するに、こうした説明はエスニック集団の煽られた行動を理解する手引きとしては完全ではない¹⁵⁾。心理的、情緒的次元の関心を払わなかった理由に欠陥があるとされうる。

この研究では、特に、他民族の侵略・征服によって同化され、自己のアイデンティティを失いつつある先住民というエスニック集団が、心理的・情緒的次元でエスニックを覚醒できる契機と、その集団の「われわれ」意識の存続を探り出すことにする。単一の社会のなかに存在する様々な集団、例えばアメリカのヨーロッパ系・アジア系移民集団や黒人などの下位集団を扱わない。その訳は、これらの集団は、伝統的な意味での、一つの基本的な人間のカテゴリーとしてのエスニック集団とみなされるため、他種類の集団の意識を得る必要がない¹⁶⁾。

例えば、先住民はマイノリティ集団や従属集団としての意識を得ることによって、一つの民族として認められる訳ではない。そして、これらの集団のエスニックの覚醒によって、基本的な人間のカテゴリーとしてのエスニック集団が保持する権利と見なさないし、民族としての滅亡の危機もありえない。これに対して、「進歩への障害」としての先住民の場合、最初は祖先の土地から駆り立てられ、その後、文明国家の開発計画によって引き起こされた固有の文化と社会の破壊により、周縁へと追いやられている。先住民のエスニックな独自性を意識することによって民族としての存続の権利を認められるのが、現時点で一番大事なことでないだろうか。

2 エスニック集団としてのアイヌ

アイヌが「日本」による同化政策の対象とされてきたのは疑うべくもない事実であり、その歴史は豊臣時代にまでさかのぼることが出来る。その後、江戸幕府によって直轄経営が行われていたが、いずれも一部分の開拓と支配にのみ終始していた。これが北海道全土に及んでくるのは、明治以降である。

柄谷行人によれば、日本の植民地主義の原型は北海道にあるという¹⁷⁾。すなわち、「北海道開拓はたんに原野の開拓ではなく、抵抗する原住民（アイヌ）を殺戮、同化すること」によって実現されたのである。そして、日清戦争以後、日本はこれをモデルとして台湾や朝鮮半島を植民地として支配していった。

そもそも北海道開拓は、その地理的位置から樺太防衛に対する重要な国防的戦略と、豊富な天然資源の確保という二つの大きな目的からなっていたが、その犠牲を最も強いられたのはアイヌ民族であった。特に、同祖同族の日本民族という単一民族国家論の隆盛は、新たに採用された戸籍制度とあいまって明治政府の国家形成に重要な位置をしめることになった。そして、同化を急ぐあまりに初等教育においてさえアイヌの言語・生活などを無視した教材・教科目が採用され、またその風俗・習慣・信仰等に関しても無理解な蔑視と干渉がとられたために、アイヌの受けた精神的混乱は救うことのできないものとなってしまった。アイヌ一般が著しく無気力で退廃的な風潮を帯びようになり、今日のアイヌ政策遂行のさまたげとすらなっている。

敗戦直後にアイヌ独立論が叫ばれ、いわゆる「旧土人給与地」の奪還を目指した戦いが進展する。途中、中だるみの状態にも陥ったが、アイヌとしての自覚は、その後アイヌ自身による権利の回復を目指した努力が展開されるなかでなされることとなる¹⁸⁾。1960年代、アジアやアフリカにおける植民地解放と新国家の創建、アメリカにおける黒人を中心とする抗議運動、イギリスにおける有色人種問題、オーストラリアにおける白豪政策の放棄と原住民の権利回復運動などが相次いで起こった。同じ頃日本では、同和対策事業特別措置法が制定されたり、解放同盟が活躍したことによって、人権の擁護と復権を目指すアイヌにとっても、大きな刺激となった。この結果1960年代後半から、アイヌ民族復権運動が様々な形で進められ、人権を中心とする権利擁護の要求は、それ以前よりもずっと多くの活動家たちによって支えられるようになった。今日、アイヌ文化の復権が若い人たちによって担われるようになったのは60年代後半の運動の成果である¹⁹⁾。

アイヌはこうした運動を通して、中国、アメリカ、オーストラリアの原住民たちや、外国の人種運動活動家たちと交流することにより、人権に関する国際的情勢にまで視野を広げている。

1986年、当時の中曽根首相が「アメリカなどでは黒人とかプエルトリコとかメキシコとかが相当多くて平均点から見ると非常にまだ低い」、「日本は単一民族であるので比較的教育は行いやすく手も届いておる面もある」という趣旨の発言に対して、アイヌ側からは大きな反動が出た。

関東では、「アイヌ民族が存在することをアイヌ自らがアピールする東京集会」で、中曽根首相の差別発言に端を発して、政府当局者たちがアイヌの存在を否定する発言を行ったことに対し、いまこそ自らの存在をアピールし、民族の平等と自決をねがう思いを表明すべき時だという声が高まった²⁰⁾。中曽根発言はアイヌを否定しようとしたが、それは逆にアイヌの凝集力を強くする結果となった。

戦後の、アイヌによるこうした一連の活動は、コナーによる「エスニックの覚醒」概念を用いることによって説明できる²¹⁾。コナーによる「エスニックの覚醒」は、以下の4点に要約される。

- ① 相対的価値剥奪の理論（価値付与の対語で、社会的価値の剥奪、つまり

生殺与奪の権が相互に行使される混乱した状態によって、自己のアイデンティティの確立と行使を説明しようとするもの)。

- ② アノミー（急激な社会変動による混乱から伝統的諸規範が権威を失い、成員の活動に対する規制の欠如した状態）。
- ③ 「中心－周囲」関係によるエスニック集団は中心的な社会の周囲や外側に置かれた状況。
- ④ 政治システムによる威信の喪失、またその結果として起こるエスニック集団の自尊心の喪失²³⁾。

1899年に、明治政府が同化政策により「旧土人保護法」を実行した際、アイヌは経済・文化・政治上のあらゆる固有の権利を剥奪された境界人となった。彼らは「基本的な人間のカテゴリー」としてのエスニック集団に付随する全ての権利をなくしただけではなく、自尊心も民族の誇りも喪失した。

コナーによれば、エスニック集団の意識は、個々のエスニック集団のアイデンティティから生じている、奪うことのできない固有の権利に基づいているがゆえに、支配権力による抑圧は難しい、とされている²³⁾。彼は民族の出自を絆としてアイデンティティを構成する人々の集合体をナショナリズムと規定する立場に立つ。支配権力は一時的にエスニック集団を抑えることができるだろうが、それは決して永久ではない。

移民・外国人労働者は、国内のエスニック集団として扱われることが多い。日本の場合は在日韓国・朝鮮人や部落も含まれている。部落とは日本大和民族と同じ民族に属する、同質民族内のいじめ問題としてふさわしいテーマであるので、この研究では扱わないことにする。また、移民はいろいろなルーツによって形成する集団であるが、難民・経済難民の定着を含めることができる。そして、定住・永住を必ずしもしない出稼ぎ労働・季節労働などの担い手の移動も含める。例えば、竹沢泰子の調査によると、1907年ワシントン州には5,868人の日本移民が居住していた。移民の大半は成功すれば錦を飾って日本に戻るつもりでいた。多くの者が三年から五年間で、1,000ドルから3,000ドルを蓄えれば、帰国するつもりでいたが1910年に入り、資金を蓄えると、自営業を始める者が増加し、定住志向も強まっていった²⁴⁾。こう考えると、外国人労働者は移民の前身ともいえるであろう。日本における外国人労働者についての恐れは、

外国人労働者がそのまま日本に定住してしまうことである。だから、入管や警察はイラン人の代々木公園締め出しに典型的に見られるように、その排除に躍起になっている。さらに、1910年以後の日本の植民地支配の生活解体による渡日と1939年の「強制連行」によって強制的に移住させられた在日韓国・朝鮮人の労働者は日本の敗戦時、およそ50～60万の朝鮮人が日本に留まった²⁵⁾。日系アメリカ人の出稼ぎ労働と違って、在日韓国・朝鮮人は「強制労働」をさせられ、労働者として日本に定着することも、移民の一種と見られる。これらの集団は、自分の母国への思いをはせながら、外国へ働きに行く。彼らは行き先の国にとって役に立つときもあれば、必要ではなくなったら邪魔な存在とされてしまう。その上、外国人労働者の定住は受け入れられず、ある種の資本と労働の対抗問題が出ている。これが拡大すれば、多民族の共存の問題になるのも当然なことであろう。

3 エスニック集団の維持機能と二風谷のアイヌの事例

前節においてアイヌへの同化政策とその抵抗史を瞥見したが、そうした同化はアイヌとしての自覚を呼び起こし、その自覚に基づく抵抗を産み出していったともいえる。ここでは、前でのべた社会学理論に立ち戻りつつ、先住民のようなエスニック集団の維持機能という問題に焦点を絞ることにする。

再度述べてきたように、身体的特徴及び文化の単一性によって特徴づけられた基本的な人間のカテゴリーとしてのエスニック集団は、その大小、経済、社会、政治的發展の如何を問わず、分類上はすべて対等と言うことになる。例えば、日本という国のなかで「日本人」（日本民族、大和民族）に対等な集団はアイヌや「琉球」である。ここから、「それぞれの集団は自らの集団性をいかにして存続させるのか」という問題が出てくる。「どの集団でも、存在するにはその集団の必要性や利害と係わりをもたなければならないし、また参加を促すためには、その成員に対して十分な報いがなければならない」²⁶⁾。これらの利害や報酬がなければ、集団は存在しない。また、集団形成がいかに共通の目標のために役立つかを認識させることも個人を支援することになる。

T. パーソンズとR. ベールズは、集団を維持し存続していくためには2種

類の役割、つまり手段的役割と表出的役割が必要であるという。物質的、手段的、実用的利害の側面と情緒的次元の側面である。この二つの役割は、社会学理論全般にとって中心の問題であるため、エスニック集団のような具体的事例でこの理論を応用させてみることも可能であり重要でもある。

手段的役割とは、いわゆる日本人の場合における「ご飯とみそ汁」の必要性である。そして、アイヌにおいては「鮭と山菜」がこれにあたる。手段的役割とは個人は十分食いたい、金を儲けたい、生活水準を改善したいなどの環境に適應するための要求がある。

これに対して、表出的役割は、集団の成員間の緊張感や解きほぐし、集団的統合を高めるために、集団の成員の情緒的支援の要請にもとづくものである。個人は血縁関係に基礎づけられた自分の背景を追求したり、根源を追求しようとしたという様式を取るかもしれない。いいかえれば、表出的役割は、集団の成員に情緒的な面で安らぎを与えたり、集団的統合を高めるために役に立つまとめ役的役割を指す。エスニック集団は、手段的要求と表出的要求の一方あるいは両方に起因して生まれる。

① 手段的基礎

まず、手段の側面で論じてみよう。先住民というエスニック集団は、他の優勢的なエスニック集団の征服によって生活の場を失う。その上、その征服的エスニック集団による同化、排除、虐殺などの手段によって、先住民集団の成員は、物理的にも精神的にもバラバラの状態になる。

具体的な問題の一つに、先住民というエスニック集団に対する差別の問題がある。日本の例を挙げよう。谷川健一によれば、日本における「部落」を差別するには宗教上の観念を必要としたし、「琉球」の場合は都を中心とした夷狄の観念を必要とした²⁷⁾。これに対して、アイヌを差別する場合は、なんらの観念を借りる必要がなかった。アイヌはその外表と風習によって直接的に差別された。エスニック集団は、この差別の問題に様々な方法で対応してきたし、対応している。一つは差別を回避するために、自らの集団を出て、支配的な集団に積極的または消極的に同化していくこともあろう。また、差別されることにより、その支配的な集団のもつ差別や偏見に立ち向かい、集合的行動を組織し、

引き続いてエスニック集団にその拠り所を求めるようになるかもしれない。1946年にアイヌによって「ウタリ協会」という組織が設立されたことはそのよき例である。そして、アイヌに属する権利や利益を保持するため、いろいろな活動をやって来たのである。

② 表出的基礎

表出的要求の場合は、根源的に拡大された血縁関係に基づくつながりである。それによって、安心と支援を得ることができるであろう。優勢者の脅威によってエスニック集団の文化を変容するが、血縁のつながりによってエスニック集団の役割は継続する。集団形成の基礎となる2種類の利害について、前者の組織がどの程度潜在的な指導力をもっているか、後者の血縁力が集団形成にどのような影響を与えるかは問題になる。この問題については後述する実態調査の部分で論ずることにする。

二風谷は、北海道南部の日高支庁沙流郡平取町の一地区である。平成6年7月末現在、総世帯数185、人口510（男242・女268）である。「二風谷」の語源についてはいくつかの説があるが、古地図には「ニプタイ」という表記が見られる。ニプタイとはアイヌの言葉でニタイ、すなわち森とか林を表す大森林のことであり、ニプタイ→ニタイ→ニプタニ→二風谷と変化したものと一般には推察されている²⁸⁾。この辺りは北海道でも比較的雪が少ない地域であり、温暖な気候である。

二風谷は、かつては狩猟中心の生活を営んでいたが、明治政府が「旧土人保護法」を1899年に制定するなどして、アイヌ同化政策を遂行した結果、農業中心の生活への転換を余儀なくされた。農業への生活に転換することは、アイヌが「アイヌでなくなっていく」ことの始まりといえた。

ここで、アイヌ一般の生活形態について述べれば、それは次の3つに分類できよう。すなわち、①生活区観光アイヌ、②観光アイヌ、③都会アイヌである。もちろん二風谷は、生活区観光アイヌの範疇に入る。これは観光業とともに、農業や造園業、運輸業などにも従事しているアイヌを指す。

社会的凝集力に関する一般的概念によれば、フェスティンガーによれば「メンバーを集団の内部のとどめさせようとするあらゆる種類の力の合成力」であ

る²⁹⁾。これは一切の集団に適用できる。エスニック集団の場合も当てはめられるが、しかし、エスニック集団の内部のあらゆるメンバーは、すべて集団の形成に役に立つかどうかが問題となる。ここで、この定義を採用すると同時に、集団メンバーの定義とエスニック・アイデンティティについての説明を付け加えておく必要がある。

集団の概念や集団の所属・非所属関係について、R・マートンは三つの要素が必要になるという。

「まず第一に、集団という社会学的概念は規定の型式に従って相互作用を行う一群の人々を指すものと一般には理解されている」³⁰⁾。

メンバー間の社会的相互作用とはエスニック集団の公式と非公式の両面にわたる「ネットワーク」や、生活の共同性を指す³¹⁾。集団の第二の基準とは「相互作用を行う人間は自分たちを『成員』として規定していること、すなわち、この集団の『外部』の人間として認められている者でなく、自分たちや他の成員を道徳的に拘束する相互作用形式の型式化された期待を彼らは抱いているということ、である…第三の基準は、相互作用を行っている人々は他の人（同じ仲間やそうでない者）によって『その集団に所属する者』として規定されていることである」³²⁾。

このように第二の基準である主観的なメンバーの自己規定とは、血縁関係にしたがうエスニック集団への一体感、一般に「エスニック・アイデンティティ」と呼ばれるものを指している。ここではこの第二の基準に基づくエスニック・アイデンティティという概念をもちいて、以下では二風谷におけるアイヌのアイデンティティを分析する。

「アイヌは髭を生やし、毛が深く、サバウンペというかぶりものをつけて、アツシを羽織り、できれば裸足」というアイヌ像があった。

これがかつてのアイヌのステレオタイプである。北海道を連想する時、「熊とアイヌ」というのも、もう一つのアイヌのステレオタイプである。日本中の多くの人達が、いまだにこうしたステレオタイプでアイヌを見ようとしている。

基本的な人間のカテゴリーとしてのアイヌの存在は、言語や宗教儀礼が禁止されたり、不当な扱いを受けてきたが、「自分のアイヌ像とはなにか」や「自分はなにものか」というアイデンティティを問うことは極めて重要なことだと

思われる。「アイヌであるか、ないか」というアイデンティティに関する問いは、他人の基準によるのではなく、自分の基準によって決定することなのである。現在のアイヌの自己像を探るには、調査が必要となる。

そのため、1994年8月に二風谷で、女性9人（全員が混血）と男性11人（内純血2人）から「聞き取り」を中心とした調査をおこなった。調査では、以下の2点に焦点をあてた。

- ① 自分のアイデンティティ、アイヌに関する文化・イメージ、被差別体験の有無、といった彼らのエスニックアイデンティティのあり様。
- ② ウタリ生活実態調査に基づき策定されたウタリ福祉政策やアイヌ新法、二風谷の未来などについての意見。

まず、①に関して、自分自身を何人と規定しているかについて、聞き取りを行った。

アイヌだと思う人は男性の場合、11人のうち9人がそう思っている。その理由としては、「両親はアイヌだから」という人が最も多く、「アイヌの血が入ってるから」と答えた人もいた。

アイヌではないと思う人は、「別に何人だとか意識しない」（1人）、「日本人に同化されたから」アイヌではない（1人）と答えた。「別に何人だとか意識しない」という回答をした人は、仕事場でたまには「アイヌ」や「シャクシャイン」と冗談で呼ばれた経験があり、それに対して「別に気にしない」という。

女性の場合、9人のうち4人は「自分はアイヌ人だ」と答えた。男性の場合と同じく、「血が入ってるから」という理由であった。3人が「別に何人だとかは意識しない」と答えた。残りの二人は「自分は日本人だと思う」と答えた。

以上をまとめると、次の3つのカテゴリーに分類できる。

- i 「自分はアイヌだと思う」
- ii 「別に何人だとかは意識しない」
- iii 「自分は日本人だと思う」

これを、ライツが示した図2にあてはめるならば、iは、「I完全メンバー」のカテゴリーに属する。完全メンバーとは「エスニック集団への帰属意識を持ち、同一の出身エスニック集団と交流がある」という特徴がある。iiは、「II境界的メンバーA潜在的」にあてはまる。というのも「別に何人だとかは思わ

ない」と答えたのは、自分のアイデンティティが動揺しているのを示しているからであり、このような潜在的メンバーは、「口ではコミュニティの存在やその必要性を否定するにもかかわらず、実際は同じエスニックな背景をもつ人々と基本的な関係が無自覚的に維持している人々」なのである³³⁾。Ⅲは、「Ⅲ非メンバー」にあてはまる。非メンバーについて、マートンは、ジンメルを引きながら、集団が衰退する原因の一つとして、有資格の非メンバーの存在を指摘して、彼の次の言説を引用している。すなわち「このような場合、『味方でない者は敵』という原理が当てはまる。本来なら集団に属しているべき人が外部に残存するとき、それがただ無関心による場合でも、その非所属は積極的に集団を害する」と³⁴⁾。エスニック集団においても、非メンバーが高率になったり、同化が進行したりすると、その凝集力が弱められる。全員20人のうち、非メンバーの数は2人であるので、エスニック集団への脅威はそれほどではないと思われる。

なお、ライツの分類のうち、「Ⅱ境界的メンバーB名目的」にあてはまる人はこの調査においては少ない。それは、二風谷に居住している人を対象としているためである。

「自分はアイヌである」という主観的な概念に対しては、男性は11名のうち9名、そして、女性9名のうち、4名、あわせて半数以上の13名の回答者が出た。つまり、日本政府による同化政策が進行することによって、アイヌの人々がアイヌ語が喋れなくなったり、サケを迎える伝統漁法を忘れたり、さらに混血が進んでも、メンバー相互の血縁にもとづく強い関係が、エスニック集団における紐帯の保持に、一定の機能をはたしているといえる。

②については、ウタリ生活実態調査により策定された、ウタリ福祉政策が役に立つかどうかをたずねた。この質問に対して、全員が「役に立つ」と回答した。ウタリ協会の運動方針は子弟の教育、住宅と環境の整備、生産基盤の確立を目指す。ウタリ協会はアイヌの唯一の組織としてある程度の潜在的な指導力を持っている。それがどの程度まで持っているかは、この質問の回答によって決められるわけである。「役に立つ」という答えを20人全てがしたという結果は、二風谷の人々が、ウタリ協会が潜在的な指導力を持っていることを信用していると説明してもよいであろう。

おわりに

コナーは、同化政策等の政治的権力が行使されても、エスニック集団は、完全に消滅しがたいとした。このことは、二風谷の調査の考察からも明らかである。すなわち、血縁にもとづく紐帯と、自分たちの権利を主張する組織（エージェント）の存在が、エスニック集団の凝集力を高める機能を果たし、メンバーのエスニック・アイデンティティの形成と確立に寄与している。エスニック集団は現代社会のなかで無視されてきたものである。だが、「エスニックの覚醒」は、「基本的な人間のカテゴリー」としてのエスニック集団自らによる、権利主張と運動を呼び起こした。

そうした動きが、ここ二風谷にも、「アイヌ復権」活動としていくつか見られる。

① 二風谷ダム裁判

1984年、総合保養地域整備法、いわゆるリゾート法が制定されたことによって、二風谷に「開発」の名のもと、ダム建設計画が持ち上がった。これに対して、二風谷に住む貝沢正氏らは反対運動を展開した。

彼らがダム建設に反対するのは、ダムによる地形の破壊を恐れてである。アイヌにとって地形や地名は文化そのものであるから、自分たちの文化を守るために、立ち上がったのである³⁵⁾。

そして、二風谷ダム裁判を通して、アイヌの存在を広くアピールすることも、この裁判を起こした大きな目的の一つである。またそうしたことから、民族の権利回復運動などの新しい動きが出てくることをも期待されている。

② 初めてのアイヌ出身国会議員の誕生

15年前に参議院全国区に立候補した秋辺得平氏に続いて、アイヌ代表の社会党比例代表候補として、萱野茂氏が国政に挑んだ。彼は二風谷ダム建設の土地買収採決取り消しを求める原告者として、そしてアイヌの代表を含む審議会を設置して、新法の制定を主張している。

このことにより、ひとつには、アイヌの人々に、アイヌ新法制定への道を一

歩み出したとする期待を抱かせている。もうひとつは、国会議員が誕生したことによって、アイヌの人々の誇りをさらに高めている。

③ 民族衣装で卒業式に出席した青年

1994年3月、北海道江別市にある酪農学園大学で行われた同校の卒業式に二風谷出身の貝沢太一君が、アイヌの正装で出席した。彼は「自分の血を考えると、ごく自然に民族衣装を着たかった」と語り³⁶⁾、アイヌの一員であることを誇りとしている。このことは彼のエスニックアイデンティティの表明であり、日本人へのアピールを意味する。こうした行動は、他のアイヌ青年に大きな影響を及ぼしつつある。

これらの事実は先住民をはじめとするエスニック集団の社会的存在と主張を、当該エスニック集団以外の人々に広く認識させることになるし、さらにそれは、現行政府の施策に対する異議申し立てとしての意味をも持つものである。

注

- 1) フランソワ・ド・フォンテット著 高演義訳『人種差別』白水社、1991年、66頁。
- 2) 馬場優子「人種主義と人種的偏見」人類学講座編纂委員会・寺田和夫編『人類学講座 第7巻 人種』雄山閣、1977年、269～271頁。
- 3) 馬場、前掲論文、275頁。
- 4) 河村、前掲論文、4頁。
- 5) R. M. マッキーヴァー、中久郎・松本通晴監訳 『コミュニティ』ミナルヴァ書房、1975年。

マッキーヴァーによると、本質的関心とは、民族間のなかで経済領域でいえば、活動のあらゆる領域における大部分の関心は相互補足的なものである。つまりどの民族によって追求される関心も、そのほとんどは、他民族から見て、相互補足的か共通であり、あるいはそのいずれをも兼ね備えているものである。例えば、日本人が今日追求している利害は、ドイツ人やアフリカ人にとっても重要なものであり、全人類にとって価値ある本質的価値については同一である。特定の民族にのみ限られない価値を持つ。

- 6) マッキーヴァー、前掲書、305～308頁。

- 7) マッキーヴァー, 前掲書, 300~302頁。
- 8) The American Heritage Dictionary Second Edition, ethnic, Houghton Mifflin Company, Boston, 1985, P.467
- 9) N・グリイザ／D・P・モイニハン, 阿部斉・飯野正子訳『人種のるつぽを越えて』南雲堂, 1986年, 428~429頁。
高島昌二「エスニシティの社会学序説」『龍谷大学社会学論集』第7号, 1986年, 3頁。
- 10) George Theodorson & Achilles Thodorson, A Modern Dictionary of Sociology, New York: Crowell, 1969, P.135
- 11) 森岡清美他編『新社会学辞典』有斐閣, 1993年, 733頁。
- 12) Connor, W., "The Politics of Ethnonationalism" Journal of International Affairs, 27-1, 1973, P.2
原文で身体的特徴の代わりに人種と定義された。が, 人種とは生物学的の出自によって共通の遺伝的身性の諸特徴の一全体を示す人の自然的群という事実であるので, 人種を身体的特徴という具体的な言い方と言い換えれば, 分かりやすいと思われる。
- 13) Connor, W, 石川一雄訳「エスノナショナリズム」『思想』850号, 1995年, 27頁。
- 14) 宮島喬・梶田孝道編『現代ヨーロッパの地域と国家』有信堂高文社, 1988年, 15頁。
- 15) Connor, 前掲論文, 34頁。
- 16) Connor, W., "The Politics of Ethnonationalism" Journal of International Affairs, 27-1, 1973, P.2
- 17) 柄谷行人「日本の植民地の『起源』」『岩波講座 近代日本と植民地 第四巻』岩波書店, 1993年, 5頁。
- 18) 鈴木二郎『現代社会と部落問題』部落問題研究所, 1993年, 209頁。
- 19) 鈴木, 前掲書, 209頁。
- 20) チカupp三恵子『風のめぐみ』御茶の水書房, 1991年, 350~352頁。
- 21) Esman, M. J., Ethnic Conflict in the Western World, Cornell University Press, 1977, PP.23-25
(浦野起央・信夫隆司訳『自決とは何か』刀水書房, 1988年, 69~70頁)

- 22) Esman, 前掲書, 70頁。
- 23) Esman, 前掲書, 70頁。
- 24) 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ』東京大学出版社, 1994年, 8頁。
- 25) 福岡安則『在日朝鮮・韓国人－若い世代のアイデンティティ』中公新書1994年, 22～25頁。
- 26) Reitz, J. G., 倉田和四生・山本剛郎訳『カナダ多民族社会の構造－エスニック集団はなぜ存続するのか－』晃洋書房, 1994年, 31頁。
- 27) 谷川健一『近代民衆の記録5 アイヌ』新人物往来社, 1972年, 12頁。
- 28) 二風谷部落誌編集委員会編『二風谷』二風谷自治会, 1983年, 121頁。
- 29) Reitz, 前掲書, 40頁。
- 30) Merton, R. K., 森他訳『社会理論と社会構造』1978年, みすず書房 260頁。
- 31) Reitz, 前掲書, 141頁。
- 32) Merton, 前掲書, 261頁。
- 33) Reitz, 前掲書, 143頁。
- 34) Reitz, 前掲書, 146頁。
- 35) 貝沢正『アイヌわが人生』岩波書店, 1993年, 121頁。
- 36) 朝日新聞, 1994年3月17日。

(この論文は修士論文から編纂したものである)

(ちんこうらん 佛教大学大学院社会学研究科修士課程)

The AINU as an Ethnic Group: A Case Study of the AINU at Nibutani.

Hsiang-Lan, Chen

This thesis concerning the social meaning of national-ethnic groups aims at clarifying the ethnic identity of the AINU in modern Japanese society. The method of this research is that of a case study on the AINU in Nibutani using both theoretical and experiential lines of analysis. How ethnic groups maintain them-selve is discussed in detail. The results indicate that relations based on kinship and human rights organizations enhance the cohesion among ethnic groups, and also confirm the formation and establishment of the members' ethnic identity.

本論文是以民族・種族集團之社會的意味來探究現代日本社會「愛奴」的種族意識。研究方法主要是舉二風谷的「愛奴」之實例，運用理論及經驗的分析，探討種族集團的維持機能。其結果顯示，血緣關係及爭取成員生存權利的組織之存在，可以提高種族集團的凝聚力，並且確認成員之種族意識的形成。